



夏期の技術対策・病害虫防除について

1 排水対策の徹底と、干ばつ対策の実施について

(1) 排水対策

まとまった降雨等による湿害回避のため、**排水溝の点検・整備等を行いましょ**う。
特に、中耕培土後、溝や周囲明渠が排水口に連結され、十分機能するか確認しましょ

(2) 干ばつ対策

暗渠が設置されているほ場では、まとまった降雨が無い限り**暗渠を閉め、土壌水分を逃がさない**ようにしましょ

また、代表的なほ場には地下水位を目視できる縦穴を設けましょ。地下水位が**70cm以下に下がる場合は、畝間かん水等で干ばつ対策**を行いましょ。



縦穴施工の様子



地下水位目視縦穴

2 病害虫防除は万全に！

1回目の防除は開花期の4週間後、2回目は9月上旬に行います。
開花期が平年並(7月25日)とすると、1回目の防除は8月22日頃になります。

【紫斑病1回・殺虫剤2回防除による防除例※】

開花期をそれぞれで確認し、
防除適期を把握しましょ

1回目防除
殺虫・殺菌剤
(開花期4週間後)

2回目防除
殺虫剤
(9月上旬)

紫斑病感染時期(開花後10~40日)

子実害虫加害時期(莢伸長~子実肥大期)

【害虫の発生に特に注意する時期】→発生が目立つ場合は臨時防除の検討を！

7月			8月			9月		
上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
←アブラムシ類→								
←ウコン/メイガ→			←フタスジ/ヒメハムシ→			←マメシ/クイガ等→		
←食葉性チョウ目→								

※ 紫斑病の1回防除体系は、アミスター20フロアブルを使用。他薬剤使用の場合は、2回散布を基本とする。

※※開花期:全株数の**40~50%**が開花始め(主茎上で1花でも開花した時)に達した日。

商品名	対象病害虫	希釈倍数・使用量	使用方法	使用時期	本剤の使用回数	散布液量	アゾキシストロピンを含む農薬の総使用回数
アミスター20フロアブル	紫斑病	2000~3000倍	散布	収穫7日前まで	2回以内	100~300リットル/10a	2回以内
		16~24倍	無人ヘリコプターによる散布			800リットル/10a	

【農薬使用の注意事項】

- ①「農薬使用者」の責任を理解し、「使用者」が責任を持って使用してください。
- ②「農薬のラベル」に記載された「適用作物」「使用量・濃度」「使用時期」「総使用回数」を確認し、「農薬使用基準」を遵守して使用してください。
- ③この資料は平成30年6月13日現在の登録状況に基づき作成しています。
登録内容は変更される場合があるので、「最新の登録状況」や「農薬のラベル」を必ず確認し使用してください。

昨年度、「里のほほえみ」を中心に発病が確認された 「ダイズ葉焼病」の発生に注意しましょう！

昨年度、里のほほえみを中心に、ダイズ葉焼病の多発ほ場が各地で確認されました。里のほほえみはエンレイより葉焼病が発生しやすいため、本年度も発生する可能性があります。

1 発生生態

葉焼病は、病原細菌による病害で、種子伝染するほか、被害茎葉で越冬し、ダイズの生育期に風雨で運ばれ、葉から発病します。

はじめは、葉に淡緑～紅褐色の小さな斑点性の病斑が現れ、次第に拡大して周囲が淡黄色の褐色～黒褐色の不整形の病斑になります。激しく発病すると、葉全体が焼けたようになり、落葉・枯死に至る場合もあります。

発病すると減収や小粒化につながります。

2 昨年の発生事例

8月中旬頃から発病が認識されるようになり、8月末～9月には離れたところから、ダイズほ場が茶色く見えるほ場が確認されるようになりました。

最も激しく発病しているのは最上位葉でした(写真参照)



葉焼病の発生状況

2 防除対応

- (1) 種子伝染するため、採種ほ産の種子を使用する。
- (2) 被害茎葉が伝染源となるため、多発ほ場は連作を避ける。
- (3) 早期から発生し多発生が予想される場合は薬剤防除を実施する。

★ 発生初期の防除が効果的なので、開花期の発病程度により、防除要否を判断してください。

【参考データ】

開花期の発病葉率10%→5%の減収(福井県 品種エンレイ)